

漢詩：文苑

著者	杉山，巴城，愛日居主人，飯田，御世吉郎，古川，高次，澤村，晴夫，山内，正瞭
雑誌名	龍南會雜誌
巻	39
ページ	39-42
発行年	1895-10-16
URL	http://hdl.handle.net/2298/4638

故郷を思ふ旅寢のかり枕あはれ敷そふあかつきの鐘

秋 月

吹きはらふ風のまにくなかむれば雲のあなたに月影そすむ

暮 松 風

彌 生

入日さす峯の梢をふきわたるなこりも高し松風の聲

初 秋

いつのまに秋や來にけんませかきにけさ音たつる萩の上風

秋 夕

さらてたに淋きき秋にわく露の人の心のあなうよの中

五箇山中岩間の水の流るゝを見て 江 楠 生

心ある人こそ汲まめ岩清水すみて甲斐ある五箇の山里

こよひは何處へ宿らんなど云ひ合へるに

なかくにゆかしかりけり深山路は夜毎くの宿を尋ねて

庭 萩

朝日影いたくな照りを露乍ら見まくのはしき庭のはきはら

初聞秋聲

杉山巴城

炎熱一空驟雨晴書窓今夜月光清忽聞樹杪秋風起何識蟲聲總此聲

夜坐景

推戶樓頭萬里開。江城落水影徘徊。秋高露氣逼人處。三五夜中新月回。

初秋納涼

驟雨晴來心境清。蕉陰深處草蟲鳴。更看雲散月光露。梧桐一樹起晚聲。

乙未孟夏送卒業生諸子龍南學寮

乃賦似諸子且壯其行

愛日居主人

人生宛似渡東瀛。狂浪怪風事遠征。只想快晴歸到日。何驚激怒々號聲。誰知逆境心如鉄。堪得壯遊氣轉清。酒盞唱酬從是別。行哉港口細談情。

聞砧

飯田御世吉郎

月白村墟夜色凄。寒砧鳴鴉霜客心。悽丁東底事。聲忽斷。知有嬰兒求乳啼。

江村雨歸

滿望濕雲斷。又連青田渺々水。接天煙蓑衝雨江村晚。一路芙蓉漸有聲。

夜須川夏月

十里長江浮影流。天茫水色兩悠悠。怪看白鷺立沙渚。人趁夜涼踏月遊。

龍泉池

老樹蔽泉綠。鬱葱神龍吐玉水。玲瓏群童亂泳波。飛沫却怪千蛇躍水中。俗傳泉水神龍所吐故及

月夜泛湖

古川高次

小舟載客趁清風。湖上飄飄疑御空。新霽况乘三五月。眠鷗影落鏡光中。

客中秋夜

暮、雲、收、盡、夜、蕭、々、獨、對、孤、燈、坐、半、宵、鴻、雁、啼、過、殘、月、裡、聲、々、轉、覺、客、魂、消、

夜踰伍墩嶺

澤村晴夫

太、郎、坂、遠、在、霧、斗、間、路、到、峰、頭、塞、爲、關、踏、雲、跨、海、勢、如、龍、不、知、造、物、手、自、剛、吾、一、欲、探、南、山、窟、一、夜、陪、行、伏、劍、攀、前、避、虎、兮、後、避、狼、九、迴、危、棧、難、又、艱、登、盡、曉、更、未、見、日、暗、聞、波、脚、拍、岸、還、豈、料、海、風、劈、雲、處、星、芒、明、滅、認、薩、山、

登某山

山内正瞭

一、徑、登、々、水、石、間、枯、藤、破、笠、渡、潺、溪、熟、路、欲、迷、逢、人、問、一、帶、烟、雲、封、半、山、

全題

有、山、々、不、盡、一、路、上、羊、腸、憩、息、無、常、處、去、留、何、所、妨、枯、藤、扶、疲、脚、醜、石、代、胡、床、觸、眼、皆、得、句、行、々、成、幾、章、

歸路偶成

挾、路、青、松、翠、澗、衣、蒼、龍、影、裏、步、朝、暉、右、山、左、海、兩、間、路、行、聞、潮、聲、激、石、磯、

觀瀑

偃、松、架、石、綠、低、垂、橋、影、跨、溪、印、半、規、細、水、高、從、天、上、落、唯、疑、織、女、下、纈、絲、

海景

移、杖、海、邊、追、夜、涼、泊、舟、多、少、列、帆、檣、燈、紅、倒、照、波、間、影、一、百、舡、燈、二、百、光、

發某港

漸醉樂眠水枕閑、海烟歛處碧連環、遠山緩去近山走、俯仰蓬窓一尺間、

秋夕問詠

身是飛禽似倦還、柴桑下宅鎖門關、霜叢深處蟲吟露、山霧晴時月吐山、連屋風松奏淅瀝、
隔離野水送潺湲、輕肥奔走塵中客、不識人間有此間、

批 評

前 號 雜 評

龍 南 生

龍南生に一癖あり、甚た他人の著作文章を評するを好む、而も自ら文を草するを欲せず。熊本に來りてより既に數年、龍南會雜誌を讀むこと十數回に及ぶも、作者の咎を受けんことを畏れて未だ批評を試みたることなま。然れども性癖變すべからず、抑留の余殆んど狂を發せんとす。是に於てか敢て數言を陳えて、作者其人の教を請ふ所あらんとす。待ちに待ちたる龍南會第三十八號翻々とて來る、手に任せて之を披き見るに、材料富み文辭豊かに、趣味淡々、獨り評之獨り讀み、須臾に於て讀み終る。乃ち評語を筆に於て、謹で本誌の余白を汚すに至る。

論說欄内第一に掲げられる内田教授の『老子の文章を評す』は、問題頗る高尚に於て漢文哲學の部類に屬之、吾等淺學の隊を容るべきものに非ず。加ふるに未だ教授の高説の端緒に過ぎざれば、完結の上改めて卑見を述ふる所あらんとす。湯原教授の『武士道の趣味』、隨分長篇ならんと思ひの外本篇にて完結せしは、頗る遺憾に思はざるに非ず。三十七號の五ヶ條に對しては、殆んど述ぶべきところなし。思ふに本篇に於て、教授の主眼とせらるゝところは、武士道の趣味は審美學上より解釋せざるべからずといふ一點に存するが如し。三十七號に於ける五ヶ條の説明、及び前號に於ける身体前後の